

小説 二階ぐらし

「こんにちはあゝ」

玄関横の階段を上って行って、ドアをノックする。

「けんちゃん、来たよ」

けんちゃんは、待っていたように降りてきてくれる。

学校帰りに立ち寄るけんちゃんの部屋。けんちゃんは高校一年生を四回目している。といっても、正確には、高校一年生の七月ごろから、いわゆる「ひきこもり」生活に入ってしまったって、それから三年間はずっと二階の自分の部屋で暮らしていた。その間、毎年一年生の一組に在籍してきた。在籍したまま年が代わり、担任は入れ替わっていく。四年目に担任となったのが私だった。

このままでは、ずっと引きこもってしまう。何とかならないものか。けんちゃんの家がうちの家からほんの十分のところにあることも幸いして、毎日学校帰りに立ち寄るようになった。

「今日はどうしてた？」

「べつに」

「調子はどう？」

「ふつう」

「今の状況って、ふつうじゃないんだよね」

笑いながら、お決まりのやり取りを繰り返す。

「べつに」と「ふつう」しか言ってくれないけんちゃんだけど、動作法なら何とかなるかもしれないという予感だけはあった。言語面接ではけんちゃんの心は開けない。少なくとも私の未熟なスキルでは、言葉では勝負できない。

「じゃあ、肩上げ課題、やってみる？」

「うん」

けんちゃんは素直に応じてくれる。これも日参したおかげか。最初はつっぱっているように見えただけ、細くて少し切れ長の目が可愛い。

動作法を始めて間もなく、けんちゃんはいろんなことを話してくれるようになった。けんちゃんは、どうして自分が休みだしてしまったのかわからないという。学校からはゆっくり休んだらいいと言われていて、ある日、もう進級できないとどこまで、ほぼほ来てしまっていると告げられて、そのことだ

けは少し恨んでいた。もう少し早く知っていたら行けたかもしれないという恨みが少しだけあった。でも、今となっては取り返しもつかない。それを議論するよりも、現在と未来を見据えるのが動作法。

動作法をやり始めて、けんちゃんは確実に動き出した。「高校卒業程度認定試験」いわゆる「高卒認定」を受けることに同意してくれた。五月の連休明けには出願し、その後、まだ習っていない数学Ⅰの範囲を私が教えた。過去問を見たら、一定の範囲しか出なかったし、公式を覚えたら何とかなったので、私にでも教えられた。

それにしても、あれはもう、何年前になるんだろう。十年以上は経っている。当時は、高卒認定に合格した暁には、学校は退学する必要があった。八月に試験を受けて、たしか十月ごろに合格発表があった。けんちゃんはすべて合格した。

けんちゃんが学校に来てくれた。折詰のお菓子を持って、先生方に食べてほしいって。けんちゃんを知る先生は少なくなっていたけど、懐かしんでくださる方もいらっしやって、ちゃんと挨拶をしている

私服のけんちゃんが少しまぶしかった。

その後、けんちゃんは大学は受験しなかった。「しよぼい大学には行きたくない」という理由だ。私は、けんちゃんが退学してからは、もう役目を果たしたと思っ、けんちゃんちに日参するのはやめた。

お母さんが、毎年年賀状を下さるようになった。けんちゃんがアルバイトに行き始めたこととか、就職したこととか、結婚したとか。そのたびに懐かしかった。けんちゃんは口数は少ないけど、とても従順で、私がいうことは何でもうなずいてくれた。動作法を介しての間柄だったけど、私の方は、随分いろんなことを語っていたように思う。問わず語りが楽しかった。自分も癒されていたのかもしれない。今年もお母さんから年賀状が来た。

「けんじも、おかげ様で〇〇の正社員と登用試験に合格できました。(四月本採用)。△△県で頑張っています」〇〇といえ、世界の〇〇といわれる大企業。うわ、よかったね、けんちゃん。狭い二階の一室から、世界に羽ばたいたね、けんちゃん。壁にかかっていたエレキギターが、臉によみがえった。